レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『テスモグラフ』における自己分析的傾向について[1]

石　田　雄　樹

1. はじめに

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌは1769年から1789年にかけて『奇論集』(Idées singulières) と題される社会改革論を発表している[2]。この『奇論集』は全5巻から構成されており、18世紀に流行した文学ジャンルである書簡体小説の形式で書かれている。この『奇論集』に関してはこれまで多数の研究が為されており、以下に重要と思われるものを確認する。

まず『奇論集』における教育的色彩に注目したのがレチフ研究の大家であるピエール・テスチューである。テスチューは『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと文学的創造』において、レチフが教育的情熱にあふれた人間であったことを指摘し、レチフが18世紀啓蒙思想の潮流に正しく位置する作家であったと述べている[3]。そのような意味において、レチフの教育的傾向が如実に示されているのが『奇論集』であり、この社会改革論がレチフの教育的情熱を満たすために書かれたものである点は疑いえない。

テスチューの後、ダヴィッド・カワードの研究が『奇論集』の新たな側面に光を当てた。それはすなわちユートピア文学としての『奇論集』の読解の可能性の提示である[4]。カワードは『奇論集』が社会改革論としては決定的に失敗しており、思想家としてのレチフはルソーやモンテスキューと同列に並べることはできないと留保しておりながらも、『奇論集』がユートピア文学としての価値を秘めていることを指摘した。このカワードの研究が画期的であった理由は、それまで『奇論集』が思想書としては平凡な内容であり、特に注目すべき点は認められないとした風潮に対し、一石を投じたところにある。つまり、カワードは思想家としてではなく小説家としてのレチフに注目することにより、『奇論集』の持つユートピア文学としての性格を発見したのである。

このカワードの見解はレチフ研究者の間で広く認められており、その中でも

ヨームナ・シャララの『奇論集』の第4巻に当たる『アンドログラフ（人間改革論）』についての研究は、レチフ的ユートピアにおけるルソー思想の影響の大きさを明らかにしたという点で、特に注目に値するものである。シャララは次のような言葉で端的に『アンドログラフ』の持つ独特な性格を言い表している。

> La réussite de *L'Andrographe* réside moins sans doute dans la résolution des divorces idéologiques que dans la co-présence de textes d'origines et de natures diverses, qui entretiennent entre eux des rapports instables, peu ou mal hiérarchisés et qui, par le simple jeu de leur juxtaposition, font surgir des significations nouvelles[5].
> 『アンドログラフ』の成功はおそらくイデオロギー的対立の解決にあるのではなく、さまざまな由来と性質を持つテクストの共存に存しているのである。このテクストは、ほとんど階層化されていないか、あるいは稚拙に階層化された、不安定な諸関係をテクスト間に保持しており、また並置の単純な作用によって、新たな意味を出現させるのである。

レチフが『アンドログラフ』で試みたことは社会全般の改革論を構築することであったが、しかし実際にはレチフは改革の実現可能性というものを考慮しておらず、ただひたすら己の理想郷の専念に創造しているとシャララは指摘している。つまり、『アンドログラフ』におけるレチフの試みは、現実社会に無数に存在する思想的問題の解決に存していたのではなく、ルソーや他の啓蒙思想家たちの思想・哲学を自己流に受容した結果生まれたテクストに存しているのである。

以上の先行研究から次のことが判明する。すなわち、『奇論集』は社会全体の改革を志向するがあまり、改革の実現可能性を失い、結果的にレチフ的ユートピアを創造するに至ったという点である。シャララの研究は『アンドログラフ』におけるルソーの影響の強さを証明するものであり、これによってレチフ的ユートピアの起源の一端が明らかにされた。しかし、これら先行研究だけでは説明がつかない点が『奇論集』には残されている。それは最終巻に当たる『テスモグラフ（法律改革論）』である。

『奇論集』において第4巻に当たる『アンドログラフ』はレチフ的ユートピ

アの一つの完成として高く評価されてきている。先のカワードとシャララの研究はそれを裏付けるものであった。しかし、『アンドログラフ』の次に書かれ、『奇論集』全体のまとめに位置するだろう『テスモグラフ』はその内容・形式両面における迷走ぶりから研究対象としてどのように位置づけるべきか極めて難しい問題が存在した。

では具体的に『テスモグラフ』がどのような点でそれまでの『奇論集』の巻と相違しているかを以下に確認する。第一に、『アンドログラフ』は「人間」を主要なテーマとして掲げているが、実質的な内容は単なる人間論に止まらず、社会全体の改革論であり、それまでの『奇論集』のまとめとしての性格が強く、レチフ自身も『アンドログラフ』に関しては強い自信と愛着を抱いていた。構成の面でも、『アンドログラフ』は一部に論考、二部に世界各国の習俗を論じた資料編という『奇論集』のそれまで用いられてきた構成に忠実である。しかし、一転して『テスモグラフ』に注目すると、第一部に対して第二部の割合が非常に高いという不均衡さが目立ち、その内容・構成が極めて錯綜としていることがわかる[6]。またそれに加えて内容面においても『テスモグラフ』は『テスモグラフ』が主要なテーマとして扱うと言明している法律論だけでなく、文学論・劇作品・乞食論などと極めて幅広い問題を論じており、全体として統一に欠けた様相を呈している。この構成面及び内容面における不均衡さは『テスモグラフ』を改革論として読解することを妨げているばかりでなく、ユートピア論としても中途半端に終わっていることを示しており、『テスモグラフ』は雑多なテクストの集合としてしか受容できない危険性を孕んでいるのである。

なぜ『テスモグラフ』は『アンドログラフ』まで守ってきた改革論としての体裁を放棄するのであろうか。『アンドログラフ』から『テスモグラフ』への推移は何を示しているのであろうか。本論では『テスモグラフ』の意義を、レチフの思想および文学形式の変転という観点から問い直すことを目指す。その際にはレチフ的ユートピアの中心概念となる「正しき不平等」に関するレチフの思想を検討し、次に対象とする読者を見失うことになる『奇論集』の推移を分析する。まとめとして、『ムッシュー・ニコラ』で結実することになる自己分析者としてのレチフが『奇論集』を破綻させた要因であったことを指摘する。

2.「正しき不平等」をめぐる論考

長らく主要な研究対象として扱われてこなかった『テスモグラフ』の意義を明らかにするためには、まず『テスモグラフ』でレチフが何を目指していたのかを確認することが必要である。『テスモグラフ』冒頭部に置かれた前置きは以下のとおりである。

> Certainement la reforme est necessaire : mais je ne suis pas Legislateur ; je ne puis que vous exposer mes vues, en suivant la marche que je me suis deja prescrite dans *l'Andrographe*. Je commence donc absolument, et sans préambule, après vous avoir seulement averti, Que le projet de *l'Andrographe* aurait efficacement remedié à tous les malheurs de l'Espèce humaine. Mais les passions s'opposeront toujours à son execution. C'est donc un beau rêve[7].
> 確かに改革は必要だ。しかし私は立法者ではないのだ。『アンドログラフ』で自らに課していた歩みを辿ることによって、自分の見解を君に提示することしか私にはできないのだ。ゆえに私は前置きなく絶対に次のことに君の注意を促してから始めることとする。すなわち、『アンドログラフ』の計画は効果的に人類のあらゆる不幸を改善したであろうということをだ。しかし、その情念というものは常にその実行に対立するものであるだろう。だから、『アンドログラフ』は美しい夢なのだ。

この箇所では、『アンドログラフ』の改革論、すなわちレチフ的ユートピアが現実には不可能であり、それゆえに無益であることへのレチフの嘆きが鮮明に表れている。先に確認したとおり、『アンドログラフ』の価値は社会改革論としてではなく、一種のユートピア文学として存在していることが認められているが、レチフは自身が描いたユートピアが社会にとっての理想像であり、人類にとっての理想郷であることを疑問に思ってはいない。だが、そのようなレチフの考えと相違して、世間一般に『アンドログラフ』および『奇論集』が与えた影響は皆無に近いものであった。そこでレチフが『テスモグラフ』で試みたことは、『アンドログラフ』では中心に扱わなかった法律に関する論考を行なうこと以上に、『アンドログラフ』の有用性を宣伝することであった。『テスモグラフ』の中で『アンドログラフ』に関する言及が頻繁に為されていること

からもそれは明らかである。また、この『アンドログラフ』に対するレチフの自負は『ムッシュー・ニコラ』の一部を成す「わが作品」においても確認できる[8]。

これらの事実を踏まえた上で、『テスモグラフ』エピローグにおけるレチフの意見を次に確認する。

> Illustres États ! publiez toute verité ; mais alors rendez les Hommes égaux ! en leur inculquant neanmoins une verité trop negligée par les Philanthropes : C'est que le merite produit une inegalité juste, et que l'Homme sans merite n'est rien… J'ai dit[9].
>
> 輝かしき三部会よ！　全き真理を公表したまえ！　だが人間を平等にせよ！　あまりに博愛家たちになおざりにされてきた一つの真理を教え込むことによって。それはすなわち価値というものは一つの正しき不平等をもたらすということであり、無価値な人間は何ものでもないということである。私はそのことを言明したのである。

ここで述べられている極めて矛盾に満ちた「正しい不平等」とはどのようなものであるだろうか。このテーゼを理解するためには、レチフが『アンドログラフ』で築き上げたユートピア像を考慮する必要がある。

フランソワーズ・ル・ボルニュは、『アンドログラフ』でレチフが創造したユートピアは、「性別と年齢によって階級化された体系に支配されたユートピア[10]」とまとめている。レチフは私有財産を廃止し、経済面の平等を確立した上で、年齢と性別による独特な階級社会を構想したのである。

そのような「正しき不平等」が支配した世界が具体的にどのようなものであるのか、レチフはその素描を『テスモグラフ』に挿入された劇作品『二千年[11]』で試みている。『二千年』でレチフは自身のユートピアにおける婚姻制度を描いており、その婚姻制度とは社会的に名誉を得た若者が評価順にそれぞれの結婚相手を選ぶ権利を与えられるというものである。しかし、『二千年』ではその制度に反抗する若者の姿が描かれている。自分の愛する娘と結婚できないことを恐れたユニタンヴィルが既存の権力と制度、つまりレチフ的ユートピアに反抗する様子を描いているのである。最終的にユニタンヴィルが権力側と和解し、物語は円満に終わるが、この劇作品の意味するところは示唆的である。な

ぜなら『二千年』は『アンドログラフ』でレチフが提示したユートピアが仮に実現されたとしても、それが決して上手くいくものではないことをレチフ自身が理解していたことを明瞭に示しているからである。言葉をかえていえば、レチフは『テスモグラフ』内で、社会を改革する意志をすでに喪失しているのである。

この内容面における『アンドログラフ』から『テスモグラフ』に至る変化は形式面においても同様に確認できる。それは『奇論集』が採用した書簡体小説という形式の面においてである。そもそも、なぜ『奇論集』が書簡体小説という形式で書かれたのであろうか。この点に関して先に挙げたシャララは、『奇論集』は書簡体小説として書かれることにより、その実質的内容はともかくにせよ、改革論として直接的に公衆に提示されることを危惧したためであると指摘している。果たして、社会改革論である『奇論集』を社会改革論として読まれることをレチフが恐れていたということがありえるのであろうか。だが、このレチフの二律背反の側面は、『アンドログラフ』と『テスモグラフ』のさまざまな箇所で確認することが可能である。たとえば、『アンドログラフ』の冒頭部分である。

> Je n'ai pas entendu, mon cher Fils, m'ériger en Législateur. Ce sont des vues que je présente modestement, et que j n'avais destinées d'abord qu'à votre instruction particulière[12].
> 息子よ、私は立法者として自らを任じようとはしていないのだ。これらは私が慎み深く提案するところの意見であり、またそれらは何よりもまず君の個人的な教育に向けられたものに過ぎないのだ。

父ダルザンのこの前置きは書簡体小説の形式を尊重するためとも考えられるが、それ以上に作者の言い訳としての面が強く表れている。レチフは『アンドログラフ』はあくまで父が息子に施す教育に過ぎず、社会全般に向けられた改革案ではないと予防線を張っているのである。

こうした点を考慮すると、書簡体小説の形式を採用したことが少なくとも『アンドログラフ』と『テスモグラフ』において有効であったかどうかは疑問であるといわねばならない。なぜなら、『アンドログラフ』と『テスモグラフ』は『奇論集』の他の巻と比較しても明らかに書簡体小説としての要素が薄く、

特に『テスモグラフ』に至っては書簡体小説の形式は途中で放棄されてしまうからである。

以上の検討から、『テスモグラフ』においては内容面における改革論の放棄と形式面における書簡体小説の放棄が対応しているという事実が判明し、またそれに加えて劇作品『二千年』の存在は、レチフが『テスモグラフ』を準備している段階で、自身のユートピア、すなわち「正しき不平等」によって統治された理想郷が実現不可能であること、少なくとも現実に実行するには問題があることをレチフ自身が自覚していたことがわかる。つまり『テスモグラフ』は社会を全体的に改革するという『奇論集』が掲げた当初の目標を喪失しているのである。

3．読者の喪失

社会改革論としてもユートピア論としても破綻した『テスモグラフ』はどのように受容することが可能なのであろうか。『奇論集』の枠組みから外れた『テスモグラフ』はどのような対象に向けて書かれた作品といえるのであろうか。この問題に答えるためには、『テスモグラフ』の破綻と迷走が具体的にどのようなものであったかを検討する必要がある。というのも、あくまで『奇論集』の基本的な構成に忠実な『アンドログラフ』と比較すると、『テスモグラフ』、特に第二部に収められた第八書簡はその内容と分量の膨大さから見ても異質だからである[13]。『テスモグラフ』の受容を困難にしてきた最たる要因が内容・形式両面において混迷を極めた第八書簡に存しているといえるだろう。

さて第八書簡の内容であるが、『アンドログラフ』のユートピア論の補足が第八書簡の大部分を占めている。しかし、その試みが上手くいっているとは到底いえないであろう。なぜなら、『テスモグラフ』で提示する論考は『アンドログラフ』に基礎を置いたものであり、『アンドログラフ』の計画が実行されない限り、『テスモグラフ』は意味をなさないからである。しかし、ユートピア論である『アンドログラフ』が公衆に受け入れられるはずもなく、だからといってレチフは『アンドログラフ』で提示したユートピアを捨て去ることもできないのである。

第八書簡でレチフが試みる『アンドログラフ』への補足は、このジレンマに由来するものであり、最終的にレチフは社会改革論である『奇論集』そのもの

を実質的に放棄してしまう。劇作品『二千年』はその破綻の象徴であり、第八書簡の一部を成す「いわゆるレシネの素行についての追伸」は、もはや改革論でもユートピア論でもない、生活者レチフの生の声がうかがえるという点で異質である。この破綻の推移は、書簡体小説の形式の放棄とも対応しており、最終的に『テスモグラフ』は改革論でもユートピア論でもない、雑然としたテクストの集合となるのである。このような『テスモグラフ』は最終的に次の言葉でようやく完結する。

> Notre but était de ne plus donner qu'un Plan de reformation partielle, à défaut de la reformation generale. [...] On s'apercevra trop, peutêtre, que cet Ouvrage ne fut qu'une distraction à mes peines[14] !
> 私たちの目的は総合的な改革の代わりに、部分的な改革の一計画を与えることのみに存していたのである。[...] おそらく気づかれるだろうが、この作品は私の苦痛を紛らわすための気晴らしに過ぎなかったのだ !

レチフはどのような読者を『テスモグラフ』において想定していたのだろうか。『テスモグラフ』が改革論であるならば、それは第一に国家に、第二に公衆に対してだったと見なしてよいだろう。『アンドログラフ』までレチフは『奇論集』を社会の改善のために書いていたと考えることは可能である。しかし、『テスモグラフ』でレチフは「正しき不平等」に支配されたユートピアへの愛着を捨てきれないばかりに、改革の実現可能性とユートピア的夢想の間で迷走し、ついに作品全体を破綻させてしまうのである。

以上のことから『テスモグラフ』は対象とする読者を喪失してしまった作品と指摘できるだろう。ではレチフの試みは無益なものだったのだろうか。

4.『ムッシュー・ニコラ』へ

レチフの自伝的作品である『ムッシュー・ニコラ』の大部分が執筆されたのは 1783 年から 1785 年にかけてであり、出版される 1797 年まで加筆修正が続けられたと考えられる。一方、『テスモグラフ』は 1782 年に構想され、1788 年から 1789 年にかけて執筆されたことから、この二作はほぼ同時期に用意されたものであり、また『ムッシュー・ニコラ』の存在は常にレチフの念頭にあった。この事実を踏まえた上で、もし『テスモグラフ』に改革論でもユート

ピア論でもない意義があるとすれば、それはすなわち、『テスモグラフ』はもはや他者に向けて書かれたものではなく、作者であるレチフが自分自身に向かって書き続けたものであるという点にほかならない。

> Ce miroir [=de *Monsieur Nicolas*] qu'il prétend tourner vers le lecteur afin qu'il s'y reconnaisse, c'est bien à lui-même d'abord qu'il le présente et il lui suffit d'y retrouver toutes les images de sa vie, précieuses par leur présence immédiate et non par leur signification morale[15].
> 自分自身を認識するために読者へと向けられているとレチフが主張するところのこの鏡［＝『ムッシュー・ニコラ』］、彼がそれを差し出すのはまず彼自身に対してなのであり、自分の人生のすべてのイメージをそこに見出せれば彼にとっては十分なのである。それらのイメージは直接的な現前によって価値があるのであり、精神的な意味によってではないのだ。

『ムッシュー・ニコラ』の極めて独特な性格を言い表したテスチューのこの指摘は『テスモグラフ』においても当てはまるといえる。つまり、レチフ作品とはそのどれもがレチフの内面の率直な告白として解釈できる可能性が存在するということである。

確かに『テスモグラフ』は構成面において著しい混乱を示している。これまでの検討から『テスモグラフ』は一冊の思想書としては破綻しているとしかいいようがない。だが、『テスモグラフ』の中の雑多なテクスト群には唯一の共通点が存在している。それはすべての文章は作者であるレチフのある内的必然性から書かれたものであるという点である。それはどのような内的必然性であるのか、『ムッシュー・ニコラ』冒頭のレチフの言明を参照しよう。

> Inconcevable labyrinthe du cœur humain ! Ô chaos, qui renfermes tous les contraires, qui te débrouillera ?... Moi, dans moi-même[16].
> 人間の心という途方もない迷宮！　あらゆる対立を含む混沌よ、誰がお前を解明しようというのか？　それは自分自身の中にある、この私の役目だ。

上記の箇所はレチフ作品を理解するための一つの大きな手がかりを与えてく

れているように思われる。それはレチフの文章とは自分自身という謎を理解するために自分自身に向かって書かれているということである。

この自己という謎を極めつくそうという衝動に忠実であろうとするレチフの態度は『テスモグラフ』においても同様に確認できる。たとえば、次の箇所である。

> Au moins (dira Quelqu'un), l'erreur soulagerait le Peuple, dans le cas où il serait tellement opprimé, qu'il ne pourrait, malgré tous ses efforts, secouer le joug, ni s'échapper, ni aler respirer avec les Loups. N'est-il pas à souhaiter alors que l'on châtre les Esprits ? que la raison sommeille ? et que pour empêcher le desespoir ou la rage, on convertisse les Sujets en Chevaux et en Bêtes-de-somme ? La supposition est peutêtre unpeu forcée ; mais en l'admettant, je desapprouve un remède qui m'ôte le droit à la vertu. Après celle-ci, le desespoir et la rage me paraissent le secours de la nature, et le plûs digne de l'Homme. J'aime mieux cesser d'être, que d'être audessous de moi-même[17].
>
> 少なくとも（誰かが口にすることであろうが）、人々があまりに抑圧されているだろう場合、つまり、あらゆる努力にもかかわらず、束縛を払いのけたり、逃れたり、悪人たちと一緒に一息ついたりすることができないだろう場合は、誤った考えは国民を楽にしてくれるだろう。そういったとき、精神をなくしてしまうことを願うべきではないのだろうか？　理性をまどろませることを望むべきなのだろうか？　絶望あるいは怒りを止まらせるために人々を馬や駄獣に変えるべきなのだろうか？　この仮定はおそらく少し不自然なものだろう。しかしそれを認めるならば、私は美徳への権利を私から奪うこの処方を否認する。その後、絶望と怒りが私には自然の救いであり、人間に最もふさわしいものに見えるのである。己以下のものになるくらいなら、生きるのを止めることのほうを私は好む。

この部分はレチフが『アンドログラフ』の補足をしているところだが、レチフの作品はレチフ自身が自分自身に向かって書いた内的独白であるという観点に立てば、単に改革論あるいは啓蒙のための文章として読解できるばかりでなく、レチフが己に向かって言い聞かせている、レチフ自身の信念の表明とも読

める可能性が生まれてくるのである。言い換えれば、レチフは改革論という体裁の下に『奇論集』というユートピア論を展開したが、しかしユートピア論でさえなくなる『テスモグラフ』の後半部は、まさに自分自身という謎を理解するために執筆を続ける作家レチフの姿が鮮明になってくるのであり、そのようなレチフの強烈な自己意識がうかがえるのが次の部分である。

> Un Sujet ne sait pas qu'il est né pour lui-même. Son Maître l'a tellement abruti, qu'il lui a ôté jusqu'à l'instinct, cette intelligence du corps, qui nous assure, que notre existence est independante de celle d'Un-autre ; que notre vie est à nous ; que nous ne pouvons être moins que nous-mêmes [...] Mourir volontairement est une faculté que l'on croit n'appartenir qu'à l'Homme[18].
> 人は自分自身のために生まれたということを国民は知らない。彼の主人があまりに彼を愚かにしてしまったので、彼から私たちに次のことを保証してくれる知性を本能に至るまで体から奪ってしまったのだ。すなわち、私たちの存在は他者の存在には依拠していないということを。私たちの生命は私たちのものだということを。私たちは私たち以下のものにはなりえないということを。[...] 自らの意志で死を選ぶことは人間だけが持っていると考えられる権利だ。

この宣言こそ『ムッシュー・ニコラ』で比類のない自己分析を行なうレチフの類稀な自覚が表れている箇所である。執拗に自己分析を続けるレチフの強烈な意志こそが、『奇論集』の失敗の最大の理由であり、また同時に最終的な到達でもあるのである。いわば、一方では『奇論集』を破綻せしめた原因である自己分析者としてのレチフの自意識は、他方では『ムッシュー・ニコラ』という形で結実しているといえるだろう。

5．結論

もし『テスモグラフ』が書かれなかったのであれば、『奇論集』は『アンドログラフ』をもってレチフ的ユートピアの一つの完成として見なすことが可能であったろう。しかし、『テスモグラフ』の内容・形式両面における破綻は、『奇論集』そのものの受容を極めて難しくさせる要因でもあった。だが、『テスモ

グラフ』はその失敗によって、社会改革論でもなく、ユートピア論でもない、レチフ特有の文学形式をもたらしたのである。それは極めて強烈な意志の支えの下に自己分析を執拗に続ける作家レチフの姿である。その意味で『テスモグラフ』は後の『ムッシュー・ニコラ』の陰画であり、自己分析者としてのレチフの意志が引き起こす文学の可能性の一端を示しているといえるだろう。

参考文献

1. テクスト

Rétif de la Bretonne, *L'Andrographe, ou idées d'un honnête-homme, sur un projet de reglement, proposé à toutes les Nations de l'Europe, pour opérer une Réforme générale des mœurs, et par elle, le bonheur du Genre-humain*, La Haie, 1782.

–, *Le Thesmographe, ou idées d'un honnête-homme, sur un projet de reglement, proposé à toutes les Nations de l'Europe, pour operer une Reforme generale des Loix…*, La Haie, 1789.

–, *Monsieur Nicolas*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de Pléiade, 1989.

2. 研究

小沢晃,「監禁と管理のユートピア―レチフ『ポルノグラーフ』について―」,『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』, 46 号, 1997, pp. 61-80.

近田武,『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ試論』, 校倉書房, 1985.

森本淳生,「主体, 欠如, 反復 : レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムッシュー・ニコラ』と虚構的自伝」,『人文・自然研究』, 7 巻, 2013 年, pp. 87-143.

Françoise Le Borgne, « Les rôles de la fiction dans les « Idées singulières » de Rétif », *Études rétiviennes*, nº 29, 1998, pp. 33-44.

–, « Rétif, l'écrivain qui se cherchait un genre », *Études rétiviennes*, nº 34, 2004, pp. 213-225.

Youmna Charara, « *L'Andrographe* : Rétif héritier de Jean-Jacques Rousseau », *Études rétiviennes*, nº 37, 2005, pp. 31-44.

Jean-Claude Courbin, « *L'Andrographe* Etude et analyse », *Études rétiviennes*, nº 14, 1991, pp. 15-34.

David Coward, « De la réforme à la "réformation" : Rétif et les "Idées Singulières" », *Études rétiviennes*, nº 9, 1988, pp. 14-36.

–, « Entre l'instinct et la raison : l'utopisme de Rétif », *Études rétiviennes*, nº 17, 1992, pp. 9-17.

Jean Desmeuzes, «Rétif et le mouvement utopique », *Études rétiviennes*, nº 17, 1992, pp.

19-32.
Laurent Loty, « Le peuple et la populace chez les philosophes des Lumières et chez Rétif », *Études rétiviennes*, nº 8, 1988, pp. 33-42.
–, « La philosophie de l'histoire et les choix politiques de Rétif après la terreur », *Études rétiviennes*, nº 11, 1989, pp. 25-45.
–, « L'An deux-mille (1789) : une utopie révolutionnaire », *Études rétviennes*, nº 17, 1992, pp. 77-98.
Pierre Testud, *Rétif de la Bretonne et la création littéraire*, Genève-Paris, Droz, 1977.
–, « Un écrivain sous la Révolution », *Études rétiviennes*, nº 11, 1989, pp. 149-163.

註

[1] 本稿は2013年10月26日に別府大学で開催された日本フランス語フランス文学会における発表「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌにおける「正しき不平等」:『アンドログラフ』と『テスモグラフ』を中心に」に加筆訂正を加えたものである。

[2]『奇論集』の各巻は以下のとおりである。タイトルはすべてギリシア語とgraphe「記述するもの」という語から作られたレチフの造語である:『ポルノグラフ（売春制度改革論）』(1769)、『ミモグラフ（演劇改革論）』(1770)、『ジノグラフ（女性改革論）』(1777)、『アンドログラフ（人間改革論）』(1782)、『テスモグラフ（法律改革論）』(1789)

[3] « En fait, il [=Rétif] a oscillé entre deux conceptions de la notion d'utilité, l'une étroite et réduite à celle de didactisme, l'autre très large au point de vider cette notion de toute signification véritable. »「実際のところ、彼（＝レチフ）は有用性という観念についての二つの構想の間で揺れ動いていたのであった。一方は教育的色彩に還元される狭い構想であり、他方はこの構想からあらゆる真実の意味を取り除くまでに至る広い構想である」(Pierre Testud, *Rétif de la Bretonne et la création littéraire*, Genève-Paris, Droz, 1977, p. 195.)

[4] « Les Idées Singulières montrent un Rétif réformateur social qui se change en "régénérateur" du monde entier, un Rétif qui abandonne peu à peu ses premières intentions pour s' envoler vers un rêve utopique que la Révolution devait briser. »「『奇論集』は「社会改革者から世界全体の「刷新者」へと変化する社会改革者レチフ」を、少しずつ当初の意図を捨て去り、革命が破壊することになったユートピア的夢想へと飛翔するレチフを示しているのである」(David Coward, « De la réforme à la "réformation" : Rétif et les "Idées Singulières" », *Études rétiviennes*, nº 9, 1988, p. 18.)

[5] Youmna Charara, « *L'Andrographe* : Rétif héritier de Jean-Jacques Rousseau », *Études rétiviennes*, nº 37, 2005, p. 44.

[6]『テスモグラフ』第一部は 1 ページから 156 ページまでであり、第二部は 157 ページから 587 ページまでである。一方、『アンドログラフ』は第一部が 1 ページから 202 ページまでであり、第二部が 203 ページから 472 ページまでである。整然と構成された『アンドログラフ』に対して、『テスモグラフ』は明らかに不均衡である。

[7] Rétif de la Bretonne, *Le Thesmographe, ou idées d'un honnête-homme, sur un projet de reglement, proposé à toutes les Nations de l'Europe, pour operer une Reforme generale des Loix…*, La Haie, 1789, pp. 9-10.

[8] « *Le Thesmographe, ou les Lois réformées*, deux parties, est moins la réforme de nos lois, que je n'entreprendrais pas, que le projet d'une loi unique pour tous les peuples du monde, en les supposant éloignés à jamais d'embrasser le beau système de *L'Anthropographe*, qui ferait le bonheur du genre humain. »「二部から成る『テスモグラフ、あるいは法律改革論』は、私がもはや取り組まないだろう法律に関する改革というよりは，世界のすべての人々に向けられた唯一の法律計画論なのである．人類の幸福を為すであろう『男性改革論』のすばらしい体系が採択されることは永遠にないとは思うが」(Rétif de la Bretonne, *Monsieur Nicolas*, « Mes Ouvrages », Paris, Gallimard, Bibliothèque de Pléiade, 1989, t. II, p. 965.)

[9] *Le Thesmographe*, p. 428.

[10] Cf. Commémorations d'Auxerre – 16-17-18 juin 2006 – Conférence de F. Le Borgne « Lire Rétif ». (http://retifdelabretonne.net/lire-retif/)

[11] *Le Thesmographe*, pp. 515-557.

[12] Rétif de la Bretonne, *L'Andrographe, ou idées d'un honnête-homme, sur un projet de reglement, proposé à toutes les Nations de l'Europe, pour opérer une Réforme générale des mœurs, et par elle, le bonheur du Genre-humain*, La Haie, 1782, p. 7.

[13] 第二部第八書簡は 385 ページから 587 ページであり、第二部の約半分を占める。

[14] *Le Thesmographe*, pp. 586-587.

[15] Pierre Testud, *op. cit*., p. 482.

[16] Rétif de la Bretonne, *Monsieur Nicolas*, t. 1, p. 5.

[17] *Le Thesmographe*, p. 406.

[18] *Le Thesmographe*, p. 416.